

## 《中学校・国語》

### I 学力診断テストの概要

#### 1 「群馬県教育課程実施状況調査」等に見られる本県児童生徒の課題

- (1) 文学的な文章については、内容の読み取りに関する問題の正答率は高く、登場人物の心情や情景描写を的確にとらえる力は定着しているものの、表現の仕方に注意しながら読み取り、音読等に生かす力が十分に身に付いていない。
- (2) 説明的な文章については、段落の要点を的確にとらえる力はある程度定着しているものの、接続詞やキーワード（キーセンテンス）の働きに着目しながら文章構成や展開を正確にとらえる力が十分に身に付いていない。

#### 2 出題領域と各設問の設定意図

領域	各 設 問 の 設 定 意 図	
C 読 む こ と ・ 説 明 的 な 文 章 の 読 解	<p>1 初読の段階における要旨の把握状況とつまづきを確認する。</p>	<p>1 文章全体の内容を踏まえて、筆者が伝えようとしていることにどのくらい迫れているか測る。</p> <p>2 自分の判断で読み取った内容にしっかり価値付けできているかどうか測る。</p>
	<p>2 読解の過程（前半）に沿った構成や内容の適切な把握状況とつまづきを確認する。</p>	<p>1 キーワード的な語句の使い方と、文章の内容、論理の展開をとらえられているかどうか測る。</p> <p>2 すぐその前の部分に書かれている内容を把握できているかどうか測る。</p> <p>3 段落の重要語句＝文章全体の中心的語句をとらえているかどうか測る。</p> <p>4 自分でまとめて説明することにより、深い意味を読み取れているか測る。</p> <p>5 外的と内的な身体能力を比較して、注意深く読み取っているかどうか測る。</p>
	<p>3 読解の過程（後半）に沿った構成や内容の適切な把握状況とつまづきを確認する。</p>	<p>1 テクノロジーが人に与えた二つの面を的確にとらえているかどうか測る。</p> <p>2 文の関係や役割を吟味し、筆者の提案をとらえられているか測る。</p> <p>3 段落の筆者の考えをしっかりと把握できているかどうか測る。</p> <p>4 段落の役割やその中の文の組立を吟味しながら読み取っているか測る。</p>
	<p>4 文章全体を通じた筆者の主張の理解状況と主体的な読み取りを確認する。</p>	<p>1 筆者の論理の展開と文章全体の内容を把握しているかどうか測る。</p> <p>2 正確な読み取りを踏まえて、読み手の立場から考えているかどうか測る。</p>

## 【資料】《問題文》

- ① かつて「必要は発明の母」と言われたが、今や「発明は必要の母」となっている。「必要」とは、より安全で、より便利で、より小型で、より省資源・省エネルギーで、より手に入れ易くて、より能率的で、というような人間が持つ欲望のことである。その欲望に突き動かされてさまざまな新製品がテクノロジーによって開発され、人々の生活に利便をもたらしてきた。その意味では、人間という知的好奇心を持つ動物特有の能力の一つがテクノロジーであることは確かである。その結果、手の延長としての道具、足の延長としての車や飛行機、眼の延長としての望遠鏡や顕微鏡、脳の延長としてのコンピュータなど、人間の身体能力を格段に拡張することができた。これによって、人間は文化という他の動物には見られない新しい可能性を獲得した。「必要」という感性が、「発明」という知的能力を駆動してきたのだ。
- ② このように考えると、「発明は必要の母」となった現代においては、感性と知的能力の順序が逆転したことに気付く。テクノロジーという人間の知的能力が、人間の感性を支配し始めているのだ。それがいつそう徹底すれば、人間が自然から切り離され、テクノロジーの中でしか生きていく実感を持たなくなってしまうだろう。既に、ケータイが人々の私的空間を占領し始めている風景はその先取りかもしれない。
- ③ テクノロジーは、確かに人間の外的な身体能力を拡張したが、見方を変えれば、個々の人間がもつ内的な身体能力は衰えてきたことになる。自家用車の使用によって足が衰えただけでなく、糖尿病が増えたというデータがある。着物を縫い直したり、揉み洗いで洗濯したり、小刀で鉛筆を削ったり、柄杓で水を汲んだり、というような手を使った労働をしなくなった結果として、手が持っていた能力も失っているのだ。エアコンで環境温度を一定のまま過ごす生活を続けていけば寒暑に応じて体温を調節する能力も衰えていくかもしれない。そうなれば、気候環境の変化に遭遇したとき、人類は果たして生き残ることができるのだろうか。
- ④ 人類学者の植原和郎が述べているように、人類は、自然界に適応しながら生き残ってきた動物としての「ひと」の側面と、テクノロジーを始めとする文化の創造者としての「ひと」の側面も持っている。この両面を調和させてきたが故に、五万年のホモ・サピエンスの歴史を紡ぐことができたのだ。しかし、今、「ひと」の側面が突出し過ぎて、「ひと」の側面が削がれつつある。とはいえ、動物としての人間が持つ自然への適応性は欠かすことができない。自然の恵みによって食料を得ており、廃棄物は自然による処理に委ねねばならない、という事実はテクノロジーの時代になっても変わらないからだ。そのことを自覚すれば、「ひと」と「ひと」をいかに調和させるかが二十一世紀の大きな課題であることは間違いないだろう。
- ⑤ (ア)そのための一つのヒントは、新しいテクノロジーとつきあうとき、これを使えば自分の持つ身体能力の何が失われていくかを考える癖を持つことではないだろうか。(イ)便利になるということは、体のどこかを動かさなくなるから、必ず「ひと」としての能力の喪失につながるからだ。(ウ)ワープロばかり使っていると、漢字を覚える能力を失っていく。(エ)GPS(全球測位システム)を使ったカーナビ頼りになると全体的な方向感覚や土地勘が失われていくだろう。(オ)ロボットに家事をやらせるようになると、包丁の使い方を忘れ、舌は微妙な味を区別できなくなる。
- ⑥ (カ)五万年のホモ・サピエンスの歴史で獲得してきた「ひと」としての能力が衰えていくのだ。むしろ、それによって新たな可能性が拓かれるなら良いではないか、という考え方もある。その場合、やはり失われるかもしれない能力と新たに獲得できるかもしれない可能性を、秤にかけて得失を判断しなければならない。それも、長い時間スケールで見通す必要がある。ある能力がいったん失われてしまうと、その回復には長い時間がかかることは、リハビリの訓練を思い出せばわかるだろう。失われた「ひと」の能力は、「ひと」が作り出したテクノロジーだけでは完全に代替できないのだ。

(池内 了「科学は今どうなっているの？」より)

※1 糖尿病……持続的に高い血糖値を示す病気の名称。

※2 ホモ・サピエンス……知性人の意。現生人類の学名。

※3 スケール……物差し、尺度。

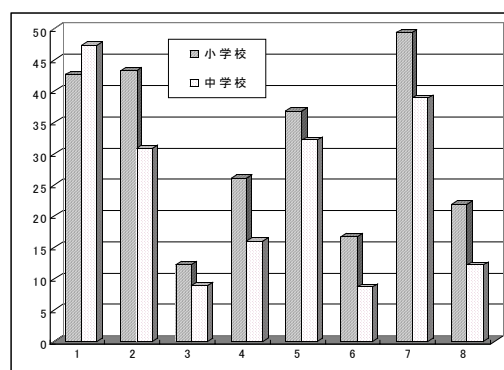
## Ⅱ 各設問における分析結果と授業改善のポイント

**課題1 説明的文章の学習に対する興味・関心を高めるとともに、生徒が目的意識をもって学習に取り組めるような工夫を行う。**

### 1 「児童生徒質問紙調査」と「学校調査」の結果…説明的な文章の学習に関する生徒の意識 (表1)

国語の学習で楽しいと感じるのは (複数選択)	小学校	中学校
1: 物語文の読み取り	42.7	47.4
2: 詩を読んだり作ったりする	43.3	30.9
3: 説明文の読み取り	12.3	8.9
4: 作文を書く	26.1	16.0
5: 話し合い(討論会など)	36.9	32.2
6: 意見発表(スピーチなど)	16.7	8.7
7: 漢字の学習	49.4	38.9
8: 言葉のきまり(文法)の学習	21.9	12.2

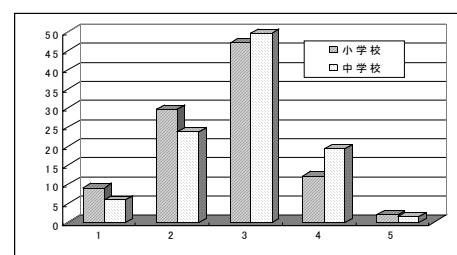
※以下すべて表の数値は%である。



(※グラフの縦軸は%、横軸は項目)

### (表2)

説明文の読み取りを行うことは好きですか	小学校	中学校
1: 好き	9.1	5.8
2: どちらかという好き	29.7	23.7
3: あまり好きではない	46.9	49.6
4: 好きではない	12.2	19.4
5: 無回答	2.0	1.5



(※グラフの縦軸は%、横軸は項目)

- 表1は、国語科の学習におけるそれぞれの内容について、「楽しいと感じる」ものを質問したもの、表2は説明的な文章の読解自体が好きかどうかを質問したものであり、それぞれを小学校第6学年の児童への調査結果とともに示した。
- この二つの表から分かるように、国語科の多様な学習活動の中で説明的な文章の学習を「楽しい」と感じる生徒は、小学校同様に設定選択肢の中で最低の数値であり、同時に説明的な文章の読解「あまり好きではない」「好きではない」と回答している生徒が「好き」「どちらかといえば好き」を大きく上回っている。なお、表1において中学校第3学年の生徒が小学校第6学年の児童と比較して、物語文の学習だけが好印象の度合いが高くなっていることが特徴的である。
- 説明的な文章を読む機会に関する調査では、学校及び家庭においてほとんど読む機会をもっていないようである。

### 2 授業改善のポイント

- パターン化された説明的な文章の授業が行われていることがうかがえる。中学校3年間の積み重ねの中で、他教科等との学習とも関連させながら、説明的な文章が生徒の知的好奇心を刺激する面白さをもっているということに気付かせるような学習を工夫する。

**課題2 初読段階で、文章全体の構成意図を押さえながら、およその内容を把握し、文章に対する課題意識を明確にもてるようにする。**

1 具体的な問題と反応率

□ (1) この文章で筆者はどのような <解答類型と反応率>

	解 答 類 型		%
ことを私たちに伝えようとしてい ますか。問題文中で、あなたが大 事だと思うことを三つ書きなさい。 *はじめに、生徒自身が本文を読む 時間を10分間とった。	類型1 (正答)	中心的な話題を3つ指摘できている	7.5
	類型2・5 (準正答)	中心的な話題を2つ指摘できている	26.7
	類型3・6・7	中心的な話題を1つ指摘できている	26.6
	類型4・8・9	中心的な話題を1つも指摘できていない	36.4
	類型0	無解答	2.8

【児童生徒質問紙調査】

「これまでの説明文の学習で、特に印象に残っている学習活動はどのようなことですか」

(選択項目は全13項目、複数選択) に対する回答の割合 ( ) は小学校第6学年の回答

①初めて文章を読んだ後で、感想を発表したり書いたりする	30.7 (36.3)%
②くわしい読み取りの学習に入る前に、だいたいどのような内容が書いてあるかみんなで話し合う	8.6 (18.6)%
③くわしい読み取りの学習に入る前に、どのようなことを読み取ったらよいか(課題)を考える	13.3 (23.2)%

2 課題分析結果

- (1) この設問は、ある一つの説明的な文章を初めて読んだ後で、生徒がどの程度に概要を把握したり、中心的な話題やキーワードに着目できるかを問うたりするものである。解答類型は、文章全体の内容を構成している中心的な内容をいくつ指摘できているかで評価するように各項目を設定した。<解答類型と反応率>の表のように、筆者が述べようとしている中心的な話題を2～3指摘できた生徒は、34.2%である。これは、小学校第6学年での調査と比較すると、それほど大きな違いはなく、中学校3年間の国語科の学習の中で、ある文章の中での筆者の主張がどのようなものであるかを、初読段階で見通す力が十分に身に付いていないことの現れであるにとらえることができる。
- (2) 「児童生徒質問紙調査」において、説明的な文章の学習活動に関する印象度を質問したところ、初読段階での①～③の学習活動については、すべて小学校よりも低い数値となっている。この表から、初読段階では感想発表程度でとどまっている様子がうかがえる。

3 授業改善のポイント

- 導入段階で文章の概要や筆者の意図をある程度把握して、その後の読解に関する課題性を明らかにする学習活動を位置付ける。
  - ・ 生徒の第一印象について発表し合う中から学習課題を設定する
  - ・ 指導過程の工夫として、課題把握の段階で問題提起を押さえるとともに、その問題点に関する結論部分を先に読み取ってしまう
- 説明的な文章の学習に限らないが、1年生段階から、各単元・教材の導入段階では学習目標とそれに関する評価項目等を提示して、生徒個々に学習の目的を明確にもたせる。

**課題3 説明されている抽象的な事柄について、文章中の具体的な説明を使ったり、文章の内容を参考に自らの生活経験等と結び付けたりして、理解を深められるようにする。**

1 具体的な問題と反応率

- ☐ - (1) ☐段落中の「必要は発明の母」の言葉の「必要」と「発明」について、同じ意味で使われている言葉を抜き出し、当てはまる言葉を下からそれぞれ選び、記号で下の☐の中に答えなさい。

	ア	イ	ウ	エ	無解答
必要	5.7	19.8	72.1	2.2	0.3
発明	5.5	4.4	5.6	84.2	0.3

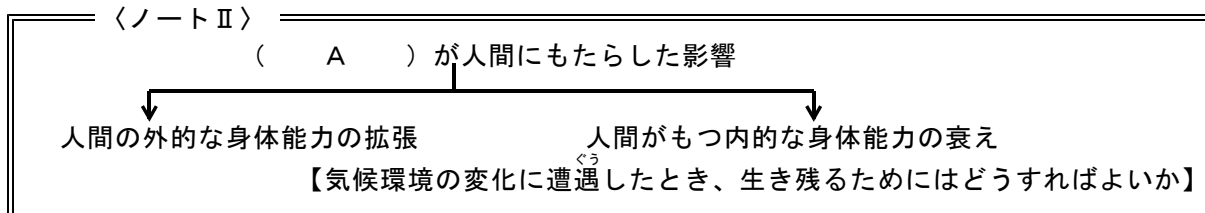
「必要」〔ア 文化 イ 安全 ウ 欲望（正答） エ 生活〕  
 「発明」〔ア 私的空間 イ 獲得 ウ 延長 エ 知的能力（正答）〕

- ☐ - (2) 〰線部(a)「それ」・(b)「その」が指している事柄をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、テクノロジーの中でしか生きている実感を持たなくなる。  
 イ 人間の知的能力が、人間の感性を支配し始めるようになっている。  
 ウ 人間は自然から切り離されていて、もはや生きていられなくなる。  
 エ 人間の感性が、人間の知的能力を支配し始めるようになっている。  
 オ 人間は、テクノロジーとは無関係な生活を送ることになっている。

	正答	誤答	無解答
(a)	80.4	19.3	0.3
(b)	79.0	20.5	0.5

- ☐ - (3) ☐段落の内容を次のように〈ノートⅡ〉にまとめました。



- ① (A) に当てはまる言葉を3段落の中から抜き出して次の☐の中に答えなさい。(正解は「テクノロジー」)  
 ② 「人間の外的な身体能力の拡張」とはどのようなことですか。具体的な例を一つ挙げて説明しなさい。  
 ③ 「人間がもつ内的な身体能力の衰え」とはどのようなことですか。具体的な例を一つ挙げて説明しなさい。

	正答	不完全	誤答	無解答
①	92.6	/	5.5	1.9
②	13.8	35.6	36.3	14.3
③	50.5	19.4	21.1	9.0

【児童質問紙調査】

「これまでの説明文の学習で、特に印象に残っている学習活動はどのようなことですか」

(選択項目は全13項目、複数選択) に対する回答の割合 ( ) は小学校第6学年の回答

⑤ 段落ごとの中心的な内容をまとめる。	45.5 (38.6) %
⑥ 接続語に気を付けて、文と文、段落と段落のつながりについて考える。	15.5 (22.7) %

2 課題分析結果

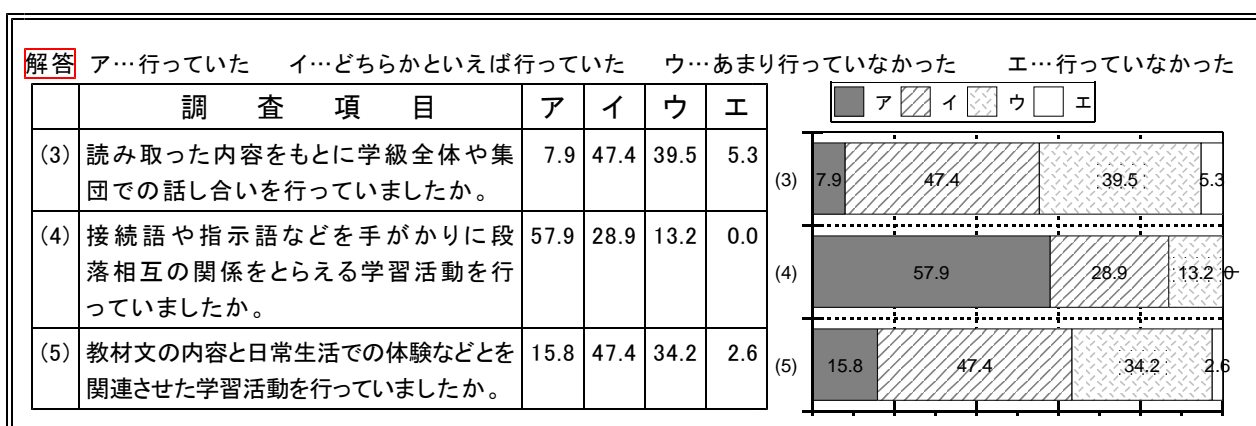
(1) この一連の設問は、文章に書かれている事実関係をいかに正確に把握できるか、把握した事実に対する自分なりの具体的な理解と解釈ができるか、を問うものである。

この内、☐ - (1)、☐ - (3)-①は文脈の中から語句相互の関連性を見出す力を測るものであり、この正答率はそれぞれ「必要」72.1%、「発明」84.2%、「テクノロジー」92.6%とかなり高い値を示している。また、☐ - (2)はいわゆる「指示語」に関するもので、文脈に沿った正確な内容の読み取りと語句相互の関連付けの力を測るものである。この正答

率もそれぞれ80.4%、79.0%と他の問題における正答率と比較するとかなり高い値となっている。これらの力については、小学校段階から説明的な文章の学習の中心的なものとして指導が行われてきているため、生徒に十分に身に付いていると判断できる。

(2) ㊦-(3)-②・③は、ある説明されている抽象的な事柄について、具体的に例示されている事例を使って説明し直したり(㊦-(3)-③)、自らの生活経験等と関連させて再構成したり(㊦-(3)-②)する力が測られる。つまり、事実として読み取った事柄をより確実に理解するとともに、自分なりの解釈を求められることになる。したがって、㊦-(3)-③が文章の中から部分的に抜き出せばよいのに比べ、㊦-(3)-②の方は、自分の中で新たな思考を生み出す必要があるだけに、より難易度が高い。結果は、㊦-(3)-③の正答率は50.5%であったが、㊦-(3)-②の正答率は13.8%と低く、無解答も14.3%と多かった。

(3) 次に示す表とグラフは、【学校調査】において、説明的な文章の指導に関して特にどのような点に力を入れて指導をしていたかを、国語担当の教師に対して行った質問である。



この表等からも明らかなように、説明的な文章の指導においては、(4)の「接続語や指示語などを手がかりに段落相互の関係をとらえる学習活動」を中心とする文章の述べ方や表現技法に関する指導と、内容に関する事実確認に重点が置かれてしまう傾向にある。これは、小学校における【学校調査】でも同様の傾向が見られる。

(4) ㊦-(3)-②・③では、さらに自分の思考を表現する力も問われている。これ以後の記述式の問題にも言えることであるが、記述しながらも必要な要素が欠如しているために「不完全」な解答として判定されてしまうケースが多くみられた。日常的な学習指導の中でのノートや学習プリントの中で、自らの考えを自分なりの表現でまとめるような学習が十分に行われていないことが一因と考えられる。

### 3 授業改善のポイント

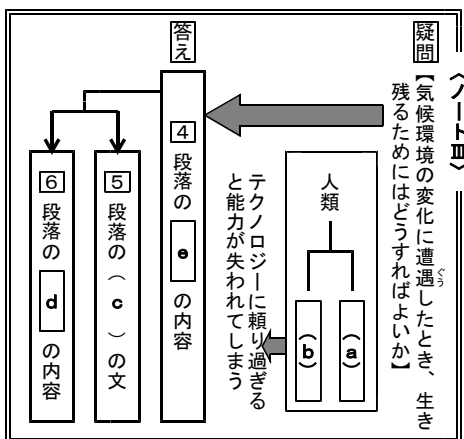
- 文章から読み取った内容について、単なる事実としてノート等にまとめるだけでなく、そのことに関する具体的な事例や説明を文章の中で確実に押さえて理解を深めるとともに、学級や小集団での話し合いの場を設け、自分たちの生活経験等と関連させたり、筆者の意見を批評し合ったりして考えを深めるような学習活動の工夫を行う。
- 筆者の意見に対する自分の考えを文章化し、ノートや学習プリントに書かせる時間と場を工夫する。また、その各自がまとめたものを発表し合い、相互に参考にし合うような学習活動を工夫する。

**課題4 各段落のキーワード・キーセンテンス、要点となる内容を確実に把握するとともに、具体的な説明と筆者の主張との展開の仕方をとらえて、文章の論理構造についての理解を深められるようにする。**

1 具体的な問題と反応率

㉓ 回段落で出された「気候環境の変化に遭遇したとき、生き残るためにはどうすればよいか」という疑問について考えるために、グループで4～6段落の内容の読み取りを行いました。その内容をまとめたものが、下の〈ノートⅢ〉です。次の話し合いの内容をよく読んで、次の(1)～(4)の問いに答えなさい。

～～～前半省略～～～  
 Cさん…今、Dさんが言った「筆者の読者への提案」ってどの文のことなの？  
 Dさん…それは、回段落の（ c ）の文に示されていると思うんだ。  
 Aさん…同感！回段落では改めてプラス面も述べた上で、今のDさんが言ってくれた（ c ）の文を言い換えるかたちで、筆者は「d」ということを断言しているからね。  
 Cさん…それじゃあ、そう考えると、（ c ）と「d」がさっきの疑問の答えでいいの？  
 Dさん…そう。でも、それだけじゃなくて、（ c ）と「d」は、回段落の内容をよりくわしく述べているわけだから、大きな答としては「e」で、（ c ）と「d」も具体的な答えになると思うな。



(1) (a)・(b)に当てはまる言葉を書きなさい。

	正答	誤答	無解答	(%)
a : ヒト (の側面)	23.8	67.1	9.2	
b : ひと (の側面)	23.8	66.5	9.7	

(2) (c)に当てはまる文を、回段落の中の(ア)～(カ)から見付け、記号を書きなさい。(正答率…55.9%)

(3) (d)に当てはまる内容を回段落の語句を使って書きなさい

正答	準正答	不完全	その他	無解答	(%)
27.2	30.4	6.0	15.8	20.6	

(4) (e)には、回段落のまとめに当たる部分の内容が入ります。回段落の語句を使って書きなさい。

正答	不完全	その他	無解答	(%)
55.6	10.3	10.4	23.7	

㉔ - (1) 文章全体を次の〈ノートⅣ〉のように要約しようと思います。(①)(②)の中に当てはまる内容を書き入れて、文章を完成させなさい。

〈ノートⅣ〉  
 人類は、自然界に適応しながら生きてきた「ひと」の側面と、知的能力によりテクノロジーを生み出した「ヒト」の側面とを持っている。現代の人間は、その「ヒト」が生み出すテクノロジーに支配されるようになってきた。しかし、人間は、テクノロジーとだけつきあっては生きていけない。なぜなら、テクノロジーにばかり頼っていると、( ① )からである。そこで、これからの人類が、「ひと」としての側面と「ヒト」としての側面とを調和させていくためには、( ② )が大切である。

	正答	準正答	誤答	無解答
①	66.2	9.8	17.8	6.2
②	47.1		39.4	13.5



## 2 課題分析結果

(1) 以上の設問は、文章の論理的な展開を見抜く力に関するもので、この力が文章の論理構造に関する理解を深めることとなり、いわゆる論理的思考力や表現力を形成する基となる。

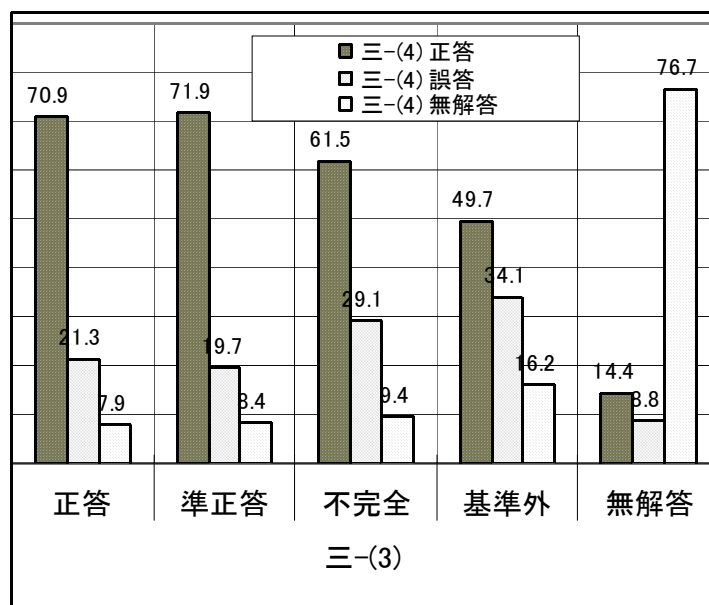
なお、大問㉓では、単に問題文を読んで解答するのではなく、設問に付してある読解に関する生徒同士の会話文を読むことと、その内容をまとめたノートの内容を理解することが各問題内容を考える鍵となる。したがって、それぞれの会話文のもつ意味やノートに示された矢印等の意味を本文と合わせて理解できた生徒には、この会話文とノートとが問題を考える上でのヒントとなったことと考えられる。

(2) ㉓-(1)は、筆者が「人類」を二通りの言い方で類別していることについて、ノートの空欄(a)と(b)とに当てはまる語句を指摘する問題である。ほとんどの生徒はいずれかに「ひと」と「ヒト」とが入ることに気付いていたが、本文で述べられている順番に(a)に「ひと」、(b)に「ヒト」を入れてしまったと思われる。

(3) ㉓-(2)は、「筆者の読者への提案」となっている文を探す問題である。選択範囲は回段落であり、全部で6文から構成されている。考える鍵は、(ア)の文末「～ことではないだろうか」に気付くかどうかである。結果ここでは、正答できた生徒は55.9%であったが、中学校第3学年としては、この正答率は決して好ましい結果であるとは言えない。

(4) ㉓-(3)と(4)は、各段落の要点の把握と、本文全体における筆者の主張を読み取るにかかわる問題である。(3)は会話文における「Aさん」の「cの文を言い換えるかたちで、筆者はdということを断言」が考える鍵になる。正答は回段落の第2文から答えることになるが、最後の文(第5文)を答えてしまう生徒が30.4%と多く、正答率は27.2%であった。これは、回段落における5つの文のつながりや回段落中からの論旨の展開に十分な意識を払えず、経験的に「段落の最後に結論がある」という知識をもっていることなどによる考え違いが想定される。

なお、(4)は正答率が55.6%で(3)よりも高かったが、これは、会話文の内容に頼らなくても、設問文中の「回段落中のまとめにあたる部分」をヒントに考えればよかったことによるとと思われる。右のグラフは、(3)における各解答類型に属する生徒が、(4)において、どの程度正答しているかを見るためのクロス集計の結果である。このグラフから、(3)において正答できていない準正答や不完全の生徒であっても、(4)ではかなり高い正答率をみせていることが分かる。ただし、中学校第3学年の生徒にとっては、6つの文によって構成されている形式段落の結論部分を見付ける問題としては、より高い正答率を期待したいところであった。



(5) ㉔-(1)は、文章の要約に関する問題であるが、要約文において空欄となっている要旨の中核となる筆者の主張部分を文章の中から発見するものである。したがって、要約そのものよりも、文脈の全体的なつながりや筆者の主張の展開に関して理解する力が求められ



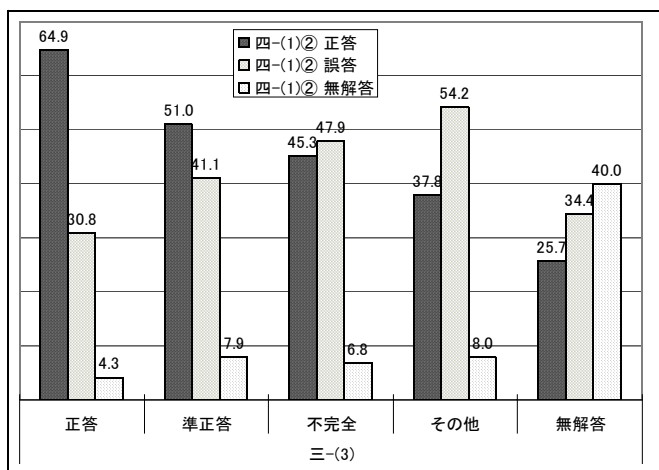
る。①が正答率66.2%と好結果であったのは、「テクノロジーにばかり頼る」ことに関する記述が、㉓段落と㉔段落に具体的な例を用いてそれぞれ述べられており、この部分に着目できた生徒が多かったことを意味する。この場合、筆者の主張は明確に表現されており、このような場合、生徒たちはかなり正確に要点を把握できるようである。

②は正答率が47.1%で約半数の生徒が正答できていた。ここでは、次の「解答類型」の二つの条件のいずれかで判定を行った。

「解答類型」に示した〔条件〕

- ①「新しいテクノロジーとつきあうとき、自分の持つ身体能力の何が失われていくか考える癖を持つ。」を取り上げている。(第㉓段落)
- ②「新しいテクノロジーによって、失われるかもしれない能力と新たに獲得できるかもしれない可能性を秤にかけて得失を判断する。」を取り上げている。(第㉓段落)

条件①については、<ノートⅢ>の「調和させていくためには」と㉓段落冒頭の「そのための一つのヒントは」の関連に気付くことが鍵となる。条件②については、文章全体の要旨となる㉓段落の内容に気付くことで解答ができる。正答した生徒が、①と②のどちらの条件で解答したかは判別できないが、要約に当たって要点を有効に使って解答しようとする意識があったかは疑問が残る。この条件②は㉓-③(㉓段落の要点として把握できていたかどうかを測る)と同じ文を答えることになる。右のグラフは㉓-③と㉔-①との結果をクロス集計したものである。



このグラフから分かるように、㉓-③で正答できていたかどうかにかかわらず、ここでは比較的好結果になっている。また、逆に㉓-③で正答できていない生徒でも40%前後の正答となっており、要約を行うに当たって各段落の要点を踏まえているかという点が課題である。

### 3 授業改善のポイント

- あるまとまりごとの中心的な話題（テーマ）について、筆者の見方・考え方をとらえたり、その展開の仕方について考えたりするための話し合い活動を多く取り入れる。その際、常に各段落のキーワードやキーセンテンス、要点となる内容の相互の関連を意識して論理展開について考えられるような指導を工夫する。
- 各段落のキーワードやキーセンテンス、要点を構造的に整理してまとめ、文章の論理的な展開について理解を深められるように、ノート指導や学習プリントを工夫する。

**課題5 読み取った内容を基に自分の見方・考え方を広げ、新たに自分なりの意見や感想を表現できるようにする。**

1 具体的な問題と反応率

- 四-(2) この文章を読んで、「a 共感したこと」を一つ取り上げ、そのことについての「b 感想や意見」を書きなさい。

正答	準正答	不完全	その他	無解答	(%)
42.7	9.4	7.0	26.2	14.7	

2 課題分析結果

- (1) この設問は、読み取った内容を基に、そこから自分なりの新たな課題を見付けられるかを問うものである。生活経験や学習経験と文章の内容とを関連させて自分なりの課題意識をもつことは、これから求められる「PISA型読解力」の最も重要な要素となる。
- (2) この設問では「無解答」が14.7%と予想以上に多かった。文章を読んで感想等を書く学習は小学校以来十分に行ってきたおり、中学校3年生にとってはほとんど支障なく何らかの記述ができると考える。この設問の場合、「a 共感したこと」をまず挙げることでつまづいてしまった生徒が多かったようである。記述をしながら「その他」の基準以外の判定となった生徒が26.2%といたが、これらの生徒は、結局、文章の中核的な内容に関する記述ができていなかった。

3 授業改善のポイント

- 読み取った内容を基に、他教科の学習内容や身近な生活上の問題点と関連させた新たな自分なりの課題をもてるように、学級や小集団で意見交換等をする機会を設定する。
- 中学校3年間の説明的な文章の積み重ねの中で、要旨を的確に把握するとともに、その内容に関して批評・評価を行う学習の場を工夫する。